

大嘗祭の意味

2019年5月1日、天皇陛下の生前退位を受けて、新たな天皇陛下が即位される。皇位継承を内外に示す「即位の礼」が同年10月22日に国事行為として行われると発表され、同時に11月14、15日に「大嘗祭」が皇室行事として行われることも発表された。しかし、ほとんどの国民は即位の礼と「大嘗祭」の違いが分からず、国事行為と皇室行事に分ける意味もよく知らないのではなかろうか。

これまでも折に触れて「新嘗祭」のことなどを説明してきたが、日本の「農業と国土」を語るうえで、大嘗祭や新嘗祭を知らなければ、農業国としての日本を正しく理解できないと思うので、改めて説明したい。

11月23日は今日、「勤労感謝の日」として定着している。この日は本来「新嘗祭」であった。その年の米の収穫を祝い感謝する神事が新嘗祭なのである。

農業と国土

NPO 生物多様性
農業支援センター
理事長 原 耕造

戦後70年の間に国民の稲作や水田に対する意識は大きく変化した。日本は戦後、化学肥料や農業を使った近代農業に転換し、米の生産量は飛躍的に増えた。しかし、近年は欧米の食文化の影響や米の生産調整などの農業政策もあつて、米離れが進んだ。日本の食料自給率は4割以下に落ち



天皇陛下のお田植

込み、耕作放棄地は40万畝にも及ぶ。

その結果、稲作と水田が食糧及び食糧生産の場としてだけ考えられるようになって、新嘗祭という言葉も死語になった。日本は古事記などに国の美称として「豊葦原瑞穂の国」と出てくる。「神意」によって稲が豊かに実り栄える国」の意味だ。日本人は「豊葦原瑞穂の国」に帰属する民、という日本人としての意識が欠如してしまったと言えよう。

「大嘗祭」は、天皇が新たな即位した年の「新嘗祭」の行われぬことである。平成天皇が即位された30年前にも行われ、来年はそれ以来の行事になる。そこで、改めて「日本国民の象徴である新天皇陛下が何故、稲作神事を行う神官を引き継ぐため大嘗祭を行うか」を日本国民として考えたい。

大嘗祭とは憲法1条に規定される、象徴としての天皇の国事行為ではない。しかし、毎年お馴染みの光景だが、初夏には天皇陛下が皇居内で田植えをされ、秋には米を収穫される姿がTVで放映されている。では、なぜ憲法に記載されていない行為を天皇は行うのだろうか。

天皇には国事行為の他に「宮中祭祀」という行為があり、皇室行事として国事行為と区別される。天皇に新たに即位するためには宮中祭祀の神官としての引き継ぎが必要となる。この引き継ぎの儀式は、天皇が崩御されたり、今回のように退位した時にしか

行われぬ。日本の国家神道は、明治維新政府が日本の近代化を進めるには、西洋文明という物質文明だけでなく、キリスト教のような精神文明も必要だという認識のもとに作られた。当初は一神教の形を整えるため廃仏毀釈を進めたが、直ぐに仏教を否定することを中止した。

日本人の宗教観が西欧社会におけるキリスト教とは全く異なる概念だからだ。キリスト教は、世の中全てを「エホバの神」が創造したとする。だが、神道は世の中の全てが神になれる「八百万の神」と考え、神々と人間と自然界が一緒になっている多神教で、祖霊信仰や浄土信仰等「魂の行方」はさまざまである。日本の歴代天皇で絶対権限を持っていたのは天智、天武、持統天皇のころと院政の後白河法皇のころ、建武の中興のころだけ、と言っても過言ではない。

農業再興の機会

それ以外の時代の「実質的権力」は、藤原不比等以降の貴族や、源頼朝以降の幕府が持ち続け、天皇は日本人の心の象徴としての「権威」を歴史的に持ち続けていただけだ、と言える。

明治維新の王政復古といつても、幕府という絶対権力者を否定する旗印として掲げられたもので、西欧社会が獲得した市民革命による民主主義とは異なるものだ。「君臨すれども統治せず」

という天皇の仕組みで、忘れてはならないのが「稲作信仰の元締め」としての神官の機能である。

唐から律令制度が導入された時に、政治の仕組みとして太政官制度が整備され、同時に神祇官制度というシステムも整備された。神祇官という仕組みは日本独自のもので、そのルーツは縄文時代のシャーマニズムにまで遡ることができると

日本人の原始信仰は、稲作の出来不出来によって自分たち家族の生存が左右されるところからの信仰で「豊葦原瑞

穂の国」の民の心そのものなのだ。天皇はその神官の元締めであり、日本国民の稲作信仰を代表して宮中祭祀を行っていると言える。

稲作は労働力集約型の農業であり、家族総出でしなければ成就できず、水管理という村の共有作業を避けて通ることはできない。自然現象に左右され、人間の努力だけではどうにもならない部分も多く、自ずから自然に対する畏怖と信仰が芽生えたのである。

その信仰の元締めの役割を神祇官である天皇が持ち続け、来年の大嘗祭でその引き

継ぎの儀式が行われるのだ。豊葦原という日本の国土に生まれ、瑞穂によって育まれてきた日本の国民として、このように歴史的な意義を持つ天皇の儀式に対して、正しい知識を持ち「日本人のころとは何か」を考える必要があるのではないか、と思う。

アメリカが離脱したTPPも日本の主導で実効性ある協定として動き始めようという時期だ。長年にわたった減反政策も廃止された今、新天皇即位と大嘗祭の意味を噛みしめ、新たな農業政策を再考すべき機会としてほしい。